十七世紀狩野派の「戯画図巻」―諸本と点描―

齋藤　真麻理

＊キーワード
画題・狩野昌運・卜養狂歌・狂言・六方

一、「戯画図巻」の制作

中近世日本の文芸は、しばしば文字と絵画の交渉から形成された。室町物語をはじめ、多くの作品が奈良絵本等に仕立てられる一方、挿絵を伴う明刊本からの摂取も盛んであった。奈良絵本の全盛期である江戸時代前期には狩野派の絵師たちも室町物語の絵巻制作等に筆を染め、その営為を通じて、大名家を中心とする知識階級のネットワークの上に多彩な表象文化が形成されてゆく。

狩野派内に相当数の御伽草子や奈良絵本・絵巻等の情報が蓄積されていたことは間違いない。著名なサントリー美術館蔵『酒呑童子絵巻』は狩野元信（文明八年・一四七六～永禄二年・一五五九）の筆、フリーア美術館蔵『酒呑童子絵巻』は狩野昌運（寛永十四年・一六三七～元禄十五年・一七〇二）の手に成る。実際、『古画備考』巻四十二狩野門人譜「昌運季信」には「元信ノ古図ノ酒呑童子巻物ヲ写ス」「江戸三丸様御用ニテ隠レ里ノ巻物」などと見え、障壁画の数々や「洛中洛外ノ図」など多くの画業が記される。昌運は宗家を支え、後に筑前藩の御用絵師に迎えられており、『卜養狂歌絵巻』制作に携わったことでも知られる。[1]

本稿が注目するのは、この昌運描く『異代同戯図』をはじめ、江戸時代前期の狩野派で制作された一連の「戯画図巻」である。作中には古今和漢の故事人物や擬人化された異類が滑稽なしぐさと取り合わせによって描かれ、諧謔性と祝言性に満ちた空間を構成している。現存諸本はすべて巻子装で詞書を持たない戯画の連続から成るが、スペンサー・コレクションの奈良絵本『弥兵衛鼠』（『鼠草紙出世物語』）や『富士の人穴草子』など、室町物語を踏まえた場面を含む点が注目される。[2]能・狂言などの芸能や狂歌、江戸初期風俗画、先行する説話絵巻等との親近性も高い。登場者はそれぞれにまつわる文芸を礎に絵画化されており、詞書なき「戯画図巻」は、むしろ「ことば」に満ちた豊かな世界を醸成している。一

連の作品は、従来、個別に研究の進んで来た狩野派の営為と、奈良絵本や風俗画等の制作享受とを合わせ見る上でも格好の材料であり、その分析を通して、当時の学芸や知のネットワーク、延いては画題生成史を考究する手がかりが浮かび上がってくるように思われる。

「戯画図巻」をめぐっては、近年、美術史の研究者による作品紹介や内容読解が行われている。石田佳也「御用絵師の戯画　狩野昌運筆「異代同戯図巻」について」（『サントリー美術館論集』6、二〇〇二年五月）は「戯画図巻」の本格的な考証の嚆矢であり、伝本七点を報告するとともに、昌運本の読解と「戯画図巻」の文化史的意義を論じた基本文献である。次いで狩野探幽筆と伝える徳川美術館本が報告され、制作年代の検討や素材研究が進んだ（加藤祥平「狩野探幽周辺の戯画製作について―徳川美術館本を中心に―」『金鯱叢書』44、二〇一七年三月）。

本作は書名が「異代同戯図」「化物絵」「滑稽仏画」など区々であるために、いまだ国内外に相当数の伝本が埋もれていると推測される。本稿ではこれらを「戯画図巻」と総称し、現段階の諸本を整理するとともにその特質の一端を述べてみたい。

二、「戯画図巻」の伝本と特徴

「戯画図巻」は徳川美術館本や香雪美術館本の存在により、初発は狩野探幽（慶長七年・一六〇二～延宝二年・一六七四）とその周辺と考えられ、制作時期は十七世紀に集中している。以下、伝承も含めて絵師の年代順に主要伝本を掲出する。書誌が未公開の場合はその概要も示す。

①徳川美術館本　伝狩野探幽（一六〇二～七四）。二巻。上巻三六・三×一三三九・〇cm。下巻三六・四×一三二四・七cm。箱書「探幽筆之写　化物繪　二巻」。書誌は注2加藤論文参照。

②香雪美術館本　伝狩野探幽。二巻。上巻二七・八×一〇七〇・七cm。下巻二七・八×九三八・七cm。第一紙は一三三・七cm（上）、一三三・四cm（下）。第二紙は一三六・九cm（上）、一三四・四cm（下）。以下同様に長尺の料紙を用いる。

表紙　薄青、絹、織出。

外題等　書題簽「探幽筆狂画二巻之内　暁斎主」（上）。「探幽戯画」（下）。題簽寸法一八・八×二・五cm（上）。一九・〇×二・〇cm（下）。

見返し　金銀砂子切箔散らし。寸法三四・八cm（上）。三〇・三cm（下）。

伝来　河鍋暁斎旧蔵。村山コレクション。今尾景年による明治三十五年の極あり。

箱書等　元箱あり、金高蒔絵「探幽狂画　二巻／暁斎蔵」、寸法三二・〇×二〇・二×一二・〇cm。

備考　画中に人物名を墨書。紙継ぎ上部に順を示す墨書あり。天地断裁。上巻末に「探幽狂画／洞郁暁斎主（朱印陽刻方印）」、下巻末に「明治十一寅四月求之／探幽狂画　暁斎蔵（朱印陽刻方印）と記す。各巻の包布に墨書「二巻之内／明治廿年／洞郁暁斎主／亥三月廿二日」、墨書上部に「精神」（朱印陽刻方印）、下部に「師

匠思之」（朱印陰刻方印）。

③個人蔵本　狩野永納（一六三一～九七）筆。「滑稽図巻」。一巻。二九・三×八六九・四cm。画中に人物名を墨書。巻末に「永納筆（落款二顆）」。（未見）

④福岡市美術館本　狩野昌運（一六三七～一七〇二）筆。一巻。二八・七×一三九七・四cm。

表紙　萌黄色。絹、梅と琵琶など八宝文様の織出（金糸）。

外題等　書題簽「異代同戯図」。題簽寸法一四・二×三・四cm。金泥下絵あり。

見返し　金泥の霞に金切箔を散らす。

料紙　鳥の子。

印記等　巻末に「狩野昌運季信圖之」と墨書。朱印陽刻方印「鉤深斎」、寸法三・〇×二・九cm。

備考　画中に人物名を墨書。元箱あり、三四・〇×一〇・三×九・六cm。

⑤國學院大學図書館本　狩野昌運筆。一巻。二八・七×一〇八五・一cm。

表紙　萌黄色。絹、梅と琵琶など八宝文様の織出（金糸）。

外題等　書題簽「異代同戯図」。題簽寸法一四・二×三・三cm。金泥下絵あり。

見返し　金泥の霞に金切箔を散らす。

料紙　鳥の子。

印記等　巻末に「狩野昌運季信圖之」と墨書。朱印陽刻方印「鉤深斎」、寸法三・〇×二・九cm。

備考　請求番号、貴一五六三。画中に人物名を墨書。後補の箱あり。三三・二×九・七×九・二cm。

⑥ギメ美術館本　狩野為信（一六五五～一七一五）筆。二巻。上巻三一・四×一〇七一・五cm。下巻三一・八×一〇九一・七cm。

表紙　緑色。絹、鹿と紅葉文様の織出（金糸）。各巻二六・五cm。

外題等　なし。所蔵者整理書名「戯画図巻」。

見返し　金切箔散らし。

料紙　絹本。

備考　請求番号、MG4318～9。画中に人物名の記載なし。各巻末に「藤原為信筆」と墨書、落款二顆「狩野主水」（朱印陰刻丸印）、「狩野為信」（朱印陽刻壺印）あり。各巻とも後半に傷み。

⑦大英博物館本　狩野周信（一六六〇～一七二八）筆。一巻。三一・二×五〇九・一cm。「戯画図巻」。巻末「周信筆」、落款「如川齋」。（未見）

⑧架蔵本　伝狩野周信写。一巻。二六・六×六八三・二cm。

表紙　絹、向かい鶴等の織出。

外題等　表紙に金紙を貼付するが書名なし。箱に墨書紙片「土佐光信狂画圖　周信之写」を貼付。

見返し　金切箔を散らす。

料紙　鳥の子。

備考　画中に人物名を墨書した金紙を貼付。巻末「此一巻土佐光信狂画圖／周信寫（落款）」

⑨武蔵野美術大学本　筆者未詳。二巻。三八・六×二七九・六cm（登録番号 1998010045 00）。三八・一×一〇五〇・八cm（登録番号 1998010044 00）。仮に後者を下巻とする。

表紙　白橡色（上巻）。白鼠色（下巻）。いずれも絹、無地。

外題等　書題簽「聖賢漫画」。題簽寸法二一・八×二・五cm（上）、二五・七×一・五cm（下）。箱書「聖賢漫画」。

見返し　金切箔を散らす。

料紙　楮紙。一紙は概ね二六・六cm内外。

備考　川崎コレクション。川崎鈴彦氏の整理による（同館学芸員、佐伯聡子氏のご教示。また注1図録参照）。下巻末「此巻物二軸所蔵之壱巻ハ於三千写三月日壱巻ハ野生写閏五月日／天明元年日閏五月十三日」と記す。画中に人物名の記載なし。彩色、色指定、多数。

⑩耕三寺博物館本　筆者未詳（江戸時代後期）。一巻。二六・四×一〇四九・一cm。

表紙　金茶色。絹、鉄線唐草文様等の織出。

外題等　なし。所蔵者整理書名「戯れ絵巻」。

見返し　金泥で霞等を描く。

料紙　楮紙。

備考　画中に人物名を墨書。朱印陽刻方印二顆。「鼎盦蔵書」、寸法三・〇×三・〇cm、「書肆村上蔵書之印」、寸法三・四×二・三cm。箱あり、二九・五×七・二×六・七cm。

⑪東京藝術大学美術館本　筆者未詳。麻布一本松狩野家資料のうち。一巻。三六・五×八三五・八cm。

表紙　薄茶色むら染め紙。

外題等　打付書「滑稽佛画」。

見返し　本文共紙。

料紙　楮紙。

諸本中、注目されるのは狩野昌運筆の④福岡市美術館本と⑤國學院大學図書館本である。これらはもともと一具の図巻であったと思う。後掲のとおり、題簽は同筆で巻末の署名や落款も等しく、一紙あたりの大ぶりな寸法もほぼ一致する。重複することなく計四十二図が描かれ、巻頭は「鼠の正月風景」と「福神の武術」から始まる。即ち、昌運本は絵師の明らかな二巻の揃い本と見做すことができるのであり、本稿ではこれを基準に稿末の「場面一覧」を作成した。

そこに見るとおり、各図はある程度の連続性を持って継承されているが、模本も含まれ、明確に系統を立てるのは難しい。場面数が最多の徳川美術館本も、後世の模本であるために全場面が制作当初の姿とは言い切れず、写し崩れや後の補完も考えられる。耕三寺博物館本については制作年代は下るが、図3の弁才天が琵琶を振り上げる挙措など、ギメ美術館本に近い箇所が見受けられる。

諸本の冒頭には「鼠の正月風景」「鷹にさらわれる風神」「福神の武術」が置かれており、ゆるやかに系統が分かれている。風神の図はいわゆる「一富士二鷹三茄子」の絵画化であり[3]、いずれも正月に相応しいめでた

き図様が選ばれている。香雪美術館本のみ下巻が「寿老人と猿の首引き」から始まるが、該本は改装されており、掲出順が制作当初と異なる痕跡が見出せる。とくに下巻の大黒など「福神の武術」部分の料紙は他所と比べて汚れや疲れが目立つ一方、描きぶりが精緻であって、もとはこれが巻頭にあった可能性も考えられる。[4] やはり「戯画図巻」は本来二巻本で、巻頭は「鼠の正月風景」「鷲にさらわれる風神」「福神の武術」のいずれかが置かれていたものと推測する。「戯画図巻」はこうした揺れを見せながらも、中世から江戸時代前期の多様な文芸を取り込み、機智と当代性を反映しつつ、新たな戯れの世界を現出している。

三、「戯画図巻」の当代性 ―「六ほう」の登場―

「戯画図巻」には「洛中洛外図」や遊楽図など近世初期風俗画と近しい場面が散見し、いわば風俗画の系譜に連なる一面を持っている。その中から「かるた賭博」の図に注目してみたい。

國學院大學本では車座で博奕に興じる観音・孔子・文殊・神農らに混じって賭銭を前に「六ほう」が力んだ表情を見せ、悠然と見物する維摩の脇では十王が金勘定に余念がない。徳川美術館本は筆致や色指定などに異同はあるものの、登場者とその配置は國學院大學本と一致する。香雪美術館本の登場者も両本に同じく、並び順のみ異なる。ギメ美術館本は両本とやや距離があり、「六ほう」も描かれない。先行研究は「六方の典拠は未詳であるものの、カルタ賭博という主題での群像表現を目的に儒教・仏教・道教から無作為に選出された向きがある」とし、狂言「博奕十王」からの連想を指摘する。[5] しかし、狂言の十王が博奕打ちとの勝負に負け、地獄案内をさせられるのに対し、「戯画図巻」の十王が金勘定に勤しむ体は、中世以来の慣用句「地獄ノ沙汰モ銭ガスル」（『法華経直談鈔』『一乗拾玉抄』ほか）さながらの光景ともいえよう。

他の面々も博奕に縁ある人物が選ばれたと思う。たとえば孔子は『論語』陽貨篇巻十七之二二に「子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉、不有博弈者乎、爲之、猶賢乎已」という。むろん、この場合の博奕は双六や碁を指し、いわゆる賭博を意味しない。

ナスワサモナク、無事ニシテ永日ノ消ヌルヨリハ、博奕ヲスルハマサレリ。為之ナスワサモナクシテ居ヨリハ、博奕ヲスルハマサレリト云。聖人ノ、人ニ教ルニ博奕スルニ非ス。安閑無事ニシテ、徒ニ居コトノアサマシキト云ン為ニ、博奕ヲ假テ云ル也。徒ニイルハ、博奕ノアサマシキニハ猶劣ルト云ン為也。博奕ヲ許トハ心得ヘカラス。博者十二碁(キ)對而擲(ナクル)レ采(サイヲ)者也ト注ス。雙六ノ事也。奕ハ圍碁(キゴ)也。今ノバクチニアラズ。　（応永二十七年本『論語抄』陽貨第十七）

しかし、そもそも文字表記の持つ力は強い。この言説は、後世、孔子が博奕と結びつく機縁としては十分であったろう。加えて『孔子家語』巻第一・五儀解第七には「哀公問於孔子曰、吾聞君子不博、有之乎、孔子曰、有之、公曰、何為、對曰、為其有二乗、公曰、有二乗、則何為不博、子曰、為其兼行悪道也」といい（国立公文書館蔵古活字版）、『説苑』君道などにも同話が載る。こうした言説が浸透していたことは、崇福寺本『付

喪神絵巻』の画中詞が雄弁に物語っている。即ち、付喪神たちが囲碁や双六を楽しむ場面に続き、車座になって博奕を打つさまが描かれ、傍らに座す僧形の付喪神は「博奕は孔子のいましめし事そかし。あら〳〵うつましや。さりなから、ふ奉きらせよ」と声をかけている。「戯画図巻」の孔子がかるた博奕に興じるのも当然の帰結なのであった。

神農はこの場面を持つ諸本に必ず描かれるが、香雪美術館本・ギメ美術館本・永納本では六十四掛の図を拡げ、小判を獲得している。易学に長けた彼は自らの知によって勝負の行方を占い、見事に利を得たと解されよう。

勝負を見守る維摩もまた、博奕の場にふさわしい人物であった。『維摩詰所説経』方便品第二には「若至博弈戯處輒以度人。受諸異道不毀正信」と説かれているからである。『維摩経』は病床に臥す維摩と見舞いに訪れた文殊菩薩との問答を軸とする経典であるから、維摩とともに文殊がこの場に加わるという趣向にも納得がゆこう。しかも國學院大學本の文殊は座の中で唯一、金色の小判を積み上げている。「提婆が悪も観音の慈悲、槃特が愚痴も文殊の智慧」（「卒塔婆小町」）などと謡われたように、智慧の文殊ならではの圧勝であった。「戯画図巻」は多種多様な勝負のさまを描くのみならず、さりげなく勝敗をも示してみせる。

この面々の中でやや奇異に映るのは、儒仏神仙のいずれにも属さない「六ほう」である。刀を携え、髷を結い、いかつい挙措が印象的なこの男、果たして何者であろうか。

その問いを解く手がかりは、寛文六年（一六六六）成立の狩野昌運筆『卜養狂歌絵巻』に見出せる（参考図）。彼と國學院大學本「六ほう」は、臂を張った挙措や髭のさまなど全体によく似ている。彼は不調法な「やつこ」であった。

或人のもとへゆきけるやつこ一人あり。いかなる人ぞとたづねければ、やつこ、するがのしばがきをうつのやのものと、声よくさげにいふ。その後、所望しければ、天下一ぶひやうしものゝ下手にて侍れは、ひそかにていしゆのかたへよみてつかはりける、　柴がきをうつの山邊のうつけもの夢にもひとつあはぬ手ひやうし

（放送大学図書館蔵『卜養狂歌絵巻』）

「やつこ」について、『武江年表』の記事を確認しておこう。

○今年町奴御穿鑿あり、夢の市郎兵衛、唐犬権兵衛などいへる男伊達と号せし悪党の事なり、六方組などゝ号して、市中をはいくわいし喧嘩を仕かけ、諸人の妨せしもの也、六方、六方言葉等の事、醒世翁の奇跡考、柳亭翁の用捨箱等を見て其趣をしるべし、この男伊達の内山中源左衛門といふもの、正徳年中糀町眞法寺にて腹切し時辞世　わんざくれふんばるべいかけふばかり、あすはからすがかつかじるべい、これ則六方言葉也、この時の町奴の名三十四人談海に見えたり、

（『武江年表』承応三年（一六五四）甲午巻の二）

すなわち「六ほう」とは、万治・寛文（一六五八～七三）頃に一世を風靡した、いわば江戸の男伊達、悪党であった。「戯画図巻」が描いたのはこれである。彼らは鉄砲組、笊籬組、鶺鴒組、吉屋組、大小神祇組、唐犬組など徒党を組み、六方組と号して辺りを払った。その風俗や挙動、

伊達姿も「六方」と称されたが、徳川家綱の御代に至って厳しい取締を受けた。彼らが使った関東なまりの荒い言葉づかいは「六方詞」とも呼ばれた。[6] 天保十二年（一八四一）刊『用捨箱』上之巻・十一「六方詞」は「六方詞のみ集めし画草紙」の透き写しを添えて、以下の記事を載せる。

昔奴と、なへしは男達の事なり。（中略）或は六方者といふ事は、昔々物語にも出て人の知るところなり。詞もなまぬるきを忌、片言を好みていふ。かたじけないを、かたじうけないとのべ、泪をなだ、とつむるの類、かぞへも尽し難し。事だをこんだ、うちかくるを、ぶつかける、いはゆる関東べい也。（中略）彼六方詞、名のり詞なんどいふを、演て後狂言にかゝるが、並て当時の風なり。（中略）その六方詞のみ集めし画草紙友人豊芥子の蔵にあり。（中略）是より前に是等の草紙数種ありし事、此奥書に見えたり。これを以当時の流行おもひやるべし。

（日本随筆大成）

種彦が「当時の流行おもひやるべし」と記したとおり、寛文九年（一六六九）刊『卜養狂歌集』にも「たまはりし木地三つくみのぬりものはうるしい〳〵いかたちうけない」の一首を収め、寛文十一年（一六七一）刊『ぬれぼとけ』は六方者の平金を主人公とし、異様な出で立ちで長刀を帯び、悪所通いを続けるさまを、奴詞を織り交ぜて活写する。

古今無双の曲者と、その名は四方に隠れなき、この平金が切先へ立向かわん者あらば、砂鉢を掛けて胸板まで、切先外しに深々と、しの字を書いてやるべいは。

（日本思想大系『ぬれぼとけ』上）

粋がる平金は、儒者から「其方の有様は、人の姿で更になし。六方を専として、三味線・小哥に染み凝り、親の誹め・世の謗り、朋友の交わりも、憚る心更になく、随心多き其方は、世の遊民とこれをいふ」と諫められるが意にも介さない。寛文十二年（一六七二）刊の芭蕉撰『貝おほひ』三十番俳諧合にも「消残る雪間や諸あしふんごんだ（五番右・一友）」「小六方の木ざしや菖蒲刀の身（十二番左勝・義子）」これさ。爰許へ。小六方と。ほざけだいたるでつちは。うるしいこんでは。あるではあるぞ（十二番判詞）」など、六方詞、奴詞が頻出する（『校本芭蕉全集』6）。寛文十二年刊『後撰夷曲集』等にも六方やその荒い言葉が散見する。

蕨の宿にて馬子ともの喧咤するをみてかれが心をすなはち奴子詞にてよみ侍りし　行風

手を出せろおつてくれへいはかつらめ　とこさ蕨のしゆくの馬かた

（『後撰夷曲集』巻第六）

其男は本町二町目能登屋藤内とて名を得し町六方のかくれなく。

（貞享四年刊『武道伝来記』巻三第四「初茸狩は恋草の種」）

古き歌に、つくば山つくばつてさへでつかいにつツたつたら猶でつかゝるべい　是いはゆる関東べいなり。諺にべい〳〵詞がやむべいなら借りても三百つんだすべい　そのかみ侠客好みてかやうの詞をつかひしを奴ことばといへり。（中略）歌舞伎にて曽我狂言などに其詞をとりて用ゆ、朝比奈がもさなど是なり、（中略）奴詞は俳諧にも往々見たり、

（天保元年刊『嬉遊笑覧』巻九下言語「奴詞」）

「六方」の挙措やことばは、歌舞伎にも取り込まれて大いに人気を博すこととなった。延宝元年（一六七三）刊『六方ことば』にも肩を怒らせ、

臂を張った役者の挙措が描かれている。

溯れば、この東国的表現「いはゆる関東べい」はロドリゲス『日本大文典』に関東で盛んに使われる表現である由が記されており、奈良絵本の画中詞をも彩って、臨場感や当代性の演出に用いられていた。その一例、サントリー美術館本『鼠の草子』の婚礼の台所では、魚庖丁の役人「一郎ひやうゑ」なる鼠が「をれらもいたの物の一たんもとるへいそ」と呟きながら魚をさばいている。「戯画図巻」からは、このように継受・展開される当代性と言語表現のありようをも見て取ることができる。

四、「戯画図巻」の当代性―説話絵巻・風俗画―

「戯画図巻」には先行する説話絵巻を踏まえた場面も少なくない。たとえば「鯰に乗る善導」の半身が金色であるのは、『法然上人絵伝』第七巻第五段に語られる二祖の対面場面で、法然の夢に現れた善導の姿を模したものである。知恩院本（国宝）の挿絵では合掌する善導が画面左手から雲に乗じて現れ、詞書どおりに半身は金色に彩色されている。円形の雲が後方に尾を引く輪郭は、なるほど鯰を思わせる（https://jodo.or.jp/onki800/kinen/presentation/gyojodigital.html）[7]。

加えて『物類称呼』巻之二には、関東方言で鯰を「なまだ」と称したと見え、浄土宗の名号と関わる逸話を載せる。

なまづ　安房国吉濱村わたりにて、なまだといひ、又、にぜんぎやうと云。今按に此郷に妙本寺と号する日蓮宗有、此宗派にては大乗法を受持して一切諸経は二漸の経行なりと誹謗す、爰に浄土宗門の在家ありて鯰をなまだと呼、なまだとは南無阿みだの名号の略語なれば、それに対して日蓮宗の里民はにぜんきやうと呼にてやあらん、

確かに、善導の唱えた「南無阿弥陀仏」は「なもだ」「なまだ」とも転化する（大蔵虎廣本狂言「宗論」「南まうだ。れんげ経。ハ、なまうだ。ハ、れんげ経」。『柳多留』一一五「木の魚をなまだなまだとたたいてる」）。「鯰に乗る善導」には先行の説話画からの摂取に加え、言語遊戯も潜んでいるようである。なお、口から蛙の三尊が現れるのは、言うまでもなく、念仏を唱える善導の口から仏が現れたという説話に拠る（重要文化財「絹本著色善導大師 https://www.pref.gifu.lg.jp/page/4119.html 等）。

また、「風流の一群」に登場する北野天神が梅の枝を高く掲げ、天を仰いで器用に茶碗を回しているのは『北野天神縁起絵巻』の諸伝本に繰り返し描かれた「天拝山」の一段を踏まえた表現であろう。縁起における道真は、無実を天に訴えるべく山頂で自ら認めた祭文を掲げ、天を仰いで立つ姿で描かれる。「戯画図巻」はこれを曲芸の姿に取りなし、天神ゆかりの梅の枝を持たせたのであった。

「戯画図巻」と風俗画との密接な関係性は、「双六博奕（せうづ川ばばと鍾馗）」にも看取される。水墨風の屏風を背景に男女が双六に興じるさまは、国宝「彦根屏風」において、遊女と客とが山水屏風の前で双六を打つ図様に極めて近い[8]。周知のとおり、「彦根屏風」そのものが中国文人の琴棋書画の見立てであり、「戯画図巻」はこうした趣向を風俗画からも学んでいたと考えられる。

「戯画図巻」所見の曲芸では「隠元の蜘蛛舞」も見逃せない。蜘蛛舞は江戸初期風俗画にしばしば登場し、『洛中洛外図屏風』では林原美術館本の右隻第三・五扇や妙法寺本の右隻第三扇など、いずれも「四条五条の芝居小屋」の能の上演される傍らに見える。大英博物館本やギメ美術館本『津島祭礼図』のほか、絵入り謡本「百万」にも蜘蛛舞が描かれており、能狂言等と上演場所が重なっていたか、幕間に演じられた可能性のある、「人間も演じ、人形でもしたらしい」曲芸であった（藤岡道子「狂言の絵画資料の収集　その二―「洛中洛外図」に描かれた能・狂言」『東洋哲学研究所紀要』25、二〇〇九年）。「戯画図巻」の蜘蛛舞にはやはり時代の空気が流れ込んでおり、とくに芸能との近しさが注意を引く。

五、「戯画図巻」の当代性―芸能―

尾張の津島祭は狂言「千鳥」に「是はおもしろい祭りじやと聞いた」と語られるほど、人々を惹きつけた華麗な祭りであった。

「津島祭礼図屏風」の作例のうち、大英博物館本には蜘蛛舞のみならず、左隻第四扇の船上櫓に鉄砲で鳥を狙う猟師の人形も見える。猟師は画面左で膝を突き、鳥は右手に配されており、「何かの芸能からのモチーフかも知れない」とも指摘される（藤岡道子「狂言の絵画資料の収集　その四―大型美術本所収　在外狂言絵の探索」『東洋哲学研究所紀要』27、二〇一一年。『秘蔵日本美術大観』大英博物館Ⅰ、講談社、一九九二年等）。

そこで思い合わされるのは「戯画図巻」の「迦陵頻伽を狙う鳥さし」の図である。

鳥さしは早く『三十二番職人歌合』に竿を携えて座す姿が描かれ、鶯飼と番えられていることからも、一番の獲物は美しい声を持つ鶯であったと考えられよう。歴博甲本「洛中洛外図屏風」右隻第六扇の鳥さしが「紅梅」に止まった小鳥を狙う図などからも鶯が連想される。「戯画図巻」の迦陵頻伽が美声を誇る鶯の取りなしであった可能性は高い。

加えて『三十二番職人歌合』の鳥さし詠にはその所作が詠み込まれている。「あはれなり小とり一羽をさゝむとて天にせくゝめ地にあしをぬく」。この一首、鳥さしの所作が関心を集めていたことを端的に示している。やがてその関心は、鳥さしを芸能へ取り込んでゆくこととなった。

狂言に目を転ずれば、「ゑさし」に登場する上手の餌刺は、閻魔王から、「さらばしやばにて、鳥をさひたる所をまなふで見せよ」と所望され、所作を演じてみせている。「鶯」「餌刺十王」など、人物の所作を主眼とする「囃子事」にも鳥さしが登場する（羽田昶「狂言の囃子事」『芸能の科学』10、一九七九年。古川久「『狂言古図』解説」『能楽研究』5、一九八〇年一一月など参照）。とりわけ「鶯」は廃曲とはなったものの、蓮如はその所作に大いに感銘を受けたという（佐竹昭広「御文様」『佐竹昭広集』四、岩波書店、二〇〇九年等）。思うに、「戯画図巻」の「迦陵頻伽を狙う鳥さし」は職人絵や殺生禁断に基づく趣向というよりも、鳥さしの所作を主眼とする芸能に素材を得たものではなかったか。

実際、江戸時代初期には「祝言性を伴って歌い演ぜられた」鳥さし舞芸能が絵入り版本としても楽しまれていた（塩村耕「さいとり考―新出

初期絵入版本と鳥刺し舞古芸能―『國語と國文學』77-11、二〇〇〇年一一月）。右に紹介された『さいとり』は寛永前半頃の刊、第一図には画面中央に樹木が描かれ、左上の枝には一羽の鳥が羽を休めている。樹木の右下では鳥さしが竿をのばし、今しも先端が鳥に届こうというところ、その構図は「戯画図巻」と非常に近い。

芸能となった「鳥さし」は万治・寛文年間の『松平大和守日記』にも見え、広く親しまれていたらしい。「戯画図巻」はこうした芸能の影を彷彿させるのであるが、しかし、鳥さし舞芸能は数え歌形式で鳥の名を列挙するものの、鶯は登場しない。「迦陵頻伽を狙う鳥さし」からは、かつて蓮如の胸を打った狂言「鶯」の囃子事が響いてくるようにも思われる。

総じて「戯画図巻」には数多くの能狂言の主人公たちが登場する。「通円」「楽阿弥」「猩々」「菊慈童」「卒塔婆小町」「熊坂」「朝比奈」等々、大黒や恵比須などの福神たちも例外ではない。「風流の一群」に描かれる白装束の朝比奈などは、「能狂言絵」など、能狂言の絵画化との関係も視野に入れる必要があろう（早稲田大学演劇博物館蔵。国立能楽堂所蔵「江戸初期古能狂言之図」（bk016）と一群の資料かとされる。https://www.waseda.jp/enpaku/collection/3358/）。

六、結びにかえて

稿末「場面一覧」のとおり、「戯画図巻」には多様な勝負のさまが描かれ、観る者に「番える」楽しみを提供している。諸本は伝統的に描き継がれた挙措や表情を踏まえつつも、耕三寺博物館本などは登場者の表情を描き分けることで、無言のうちに勝負の結果を表現した。「天狗と大黒の武術」では、武具を交えた瞬間、笑みを浮かべた大黒が優勢なのであろうし、双六の勝負では「せうづがわのうは」、「仁王と地蔵の相撲」では地蔵が有利と見える。「文覚と不動の足相撲」では「六ほう」よろしく臂を張る文覚に対し、自らの足に手を添えて力む不動が形勢不利に相違ない。「戯画図巻」は細部に至るまで何からの企図を持って描かれているようである。

國學院大學本の「薄茶色の河童」が赤い五条袈裟（掛羅・絡子）を提げるのは、歴博甲本「洛中洛外図屏風」の大徳寺境内を歩く僧侶などを想起させる。この僧は高位の僧侶に許される木蘭色の色衣を身に着け、緋袈裟を下げており、禅僧と目される（「れきはくデータベース」解説）。こうした描写や隠元・即非など黄檗僧を描く点は「戯画図巻」の制作圏を考究する手がかりになろう。[9]

詞書を持たない「戯画図巻」は各要素を自在に組み替えることができ、諸本の人物比定にも揺れがある。どのようにでも読めてしまう図巻である。しかし、各図様が古典の教養に裏打ちされていることを思えば、そこから各場面がいかなるコンテクストと結びついているのかを探り、そこに映ずるあたかも連歌寄合的な遊びの趣向、連想の糸を辿ることが肝要である。[10] 本作はこうした知的遊戯を共有できる文化圏で制作享受されていたに相違なく、恐らくそれはこの時期の奈良絵本の文学圏とも重なっている。

「戯画図巻」は文学的かつ説話的奥行きを内包しつつ、文字と絵画、声と所作の交錯する豊かな異代同戯の世界を繰り広げている。絵画のみによって表現されたその世界は、観る者にそれらが前提とする言語表現を想起させるのであり、本作はことばを明示しない文学作品ともいえよう。「戯画図巻」は文学研究の観点からどう読めるのか。画題の生成・展開史にどう位置づけられるのか。なお考えてみたい。

〔注〕

（1）狩野昌運については渡辺雄二「筑前黒田藩御用絵師狩野昌運」（西日本文化協会編纂『福岡県史 近世研究編 福岡藩（三）』、一九八七年一二月）、佐々木あきつ「福岡市博物館所蔵の狩野昌運関連資料（上・中）」（『福岡市博物館紀要』27・28、二〇一八・一九年三月）などに詳しい。「戯画図巻」を取り上げた近年の展示図録にはサントリー美術館『日本の戯画』一九八六年、武蔵野美術大学美術資料図書館『昔の絵師はどんな勉強をしていたか』一九九八年、兵庫県立歴史博物館『狩野永納―その多彩なる画業―』一九九九年、福岡市美術館『日本の美 笑い』二〇〇〇年、サントリー美術館『出逢いと語らい 故事人物画と物語絵』二〇〇〇年、同館『河鍋暁斎 その手に描けぬものなし』二〇一九年、中之島香雪美術館『明恵の夢と高山寺』二〇一九年等がある。その他、『海外所在日本美術品調査報告6 パリ国立ギメ美術館 絵画』一九九六年、『秘蔵日本美術大観2 大英博物館Ⅱ』講談社、一九九二年など参照。

（2）拙稿「蟬啼鼯嘯―『鼠草紙出世物語』と『異代同戯図巻』―」（『中世の物語と絵画』竹林舎、二〇一三年）参照。「戯画図巻」をめぐる日本美術史の先行研究には松嶋雅人「研究余滴 狩野派の戯画図巻」（『江戸文学』19、一九九八年八月）、同「江戸狩野・表絵師とその御用 東京芸術大学所蔵 麻布一本松狩野家資料をめぐって」（『東京藝術大学美術学部紀要』34、一九九九年五月）、石田佳也「御用絵師の戯画 狩野昌運筆「異代同戯図巻」について」（『サントリー美術館論集』6、二〇〇二年五月）、浅野秀剛「風流の造形、なぞらえる操作―「見立」と「やつし」とその周辺」（『講座日本美術史』三、東京大学出版会、二〇〇五年）、郷司泰仁「暁斎旧蔵 狩野探幽筆「戯画図巻」について」（『暁斎』110、二〇一三年三月）、加藤祥平「狩野探幽周辺の戯画製作について―徳川美術館本を中心に―」（『金鯱叢書』44、二〇一七年三月）等があり、添田達嶺に「狩野昌運と其遺作」（『塔影』14-7、一九三八年四月）がある。文学研究では先掲拙稿のほか、口頭発表に齋藤真麻理「楽土を描く―『異代同戯図巻』とその周辺」（東アジア恠異学会第102回定例研究会、二〇一五年一一月二八日）、同「山海異物の十七世紀」（立教大学文学部日本文学科・日本文学専修設立60周年記念国際シンポジウム、二〇一六年一一月六日）等のほか、中根千絵「國學院大學本「異代同戯図」（狩野昌運筆）を読み解く―見世物、博奕、黄檗から―」（東海近世七月例会、二〇二一年七月三一日）がある。なお、戯画の掛幅をミネアポリス美術館等に所蔵。注（1）

の暁斎図録、『日本絵画の名品　ミネアポリス美術館』（サントリー美術館、二〇二一年）など参照。

（3）拙稿「故事を遊ぶ―「戯画図巻」という文芸」（『古典の未来学』文学通信、二〇二〇年一〇月）参照。

（4）香雪美術館本については、二〇二一年八月、門脇むつみ氏・大谷節子氏と熟覧させて頂く機会を頂いた。その際、紙継ぎや筆致などからこの指摘がなされた。両氏のご許可を頂いたので、謝意とともにこれが共同調査の知見であることを記しておきたい。調査に際してはサントリー美術館の上野友愛氏よりご懇切にご紹介の労を賜り、中之島香雪美術館館長の勝盛典子氏および学芸員の林茂郎氏に格別のご高配を賜った。

（5）観音と博奕との関係は、双六の勝負に負けて賭け物に窮した男が自らの観音への二千度参りの功徳を相手に与えてしまう話（『宇治拾遺物語』巻六の四「清水寺二千度参り、双六に打ち入るる事」）なども想起される。

（6）深井一郎等「「やっこはいかい」のことばの研究　近世語研究（その一）」（『金沢大学教育学部紀要　人文科学・社会科学編』30、一九八一年九月）、田中章夫「六方ことばの系譜」（『語文』40、一九八二年一一月）、出雲朝子「中世末期における東国方言の位相―『鼠の草子絵巻』の絵詞をめぐって―」（『国語と国文学』72-11、一九九五年一一月）など参照。

（7）半金色の善導像をめぐっては、成田俊治「善導大師像についての2・3の問題―特に半金色像を中心に」（『仏教文化研究』38、一九九三年九月）、高間由香里「知恩寺所蔵重要文化財善導大師像について」（『藝術研究』24、二〇一一年七月）、など参照。

（8）山本嘉孝氏よりご教示を賜った。なお、奥平俊六『彦根屏風　無言劇の演出』平凡社、一九九六年、『国宝彦根屏風』中央公論美術出版、二〇〇八年など参照。

（9）香雪美術館本の図様が『狂画苑』にも採られていることは、勝盛典子氏のコラム「踊る明恵上人―探幽がつなぐ〈戯画〉の系譜」（『明恵の夢と高山寺』中之島香雪美術館、二〇一九年）に指摘されており、「戯画図巻」享受の展開も視野に入れる必要がある。たとえば、駝鳥に乗るおとごぜを『狂画苑』は「鈿目命」と記すなどは、駝鳥は確かに世間で話題を集めた禽類ではあるが、鈿目命と関係の深い鶏との連想も検討してみる余地があるのではなかろうか。

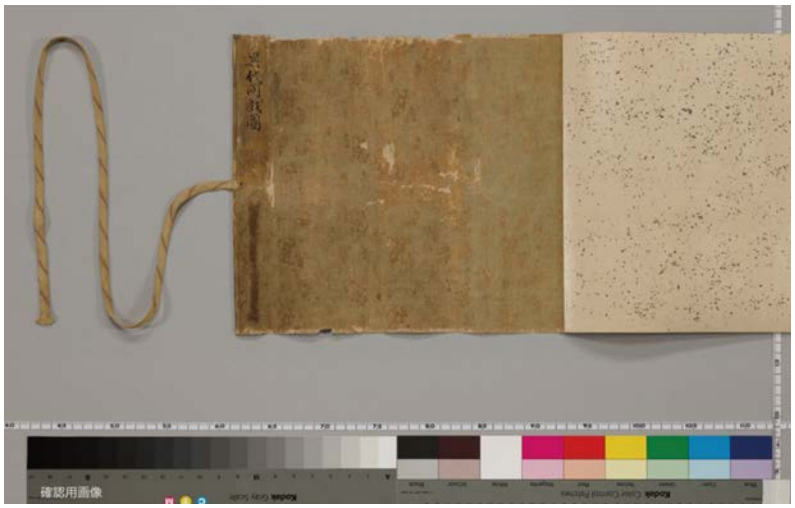
（10）島尾新「連歌的世界の図像学―室町時代の「尽し」風屏風を例に」（『講座日本美術史』2、東京大学出版会、二〇〇五年五月）が示唆に富む。

〔付記〕

貴重な資料の閲覧や図版掲載をご許可下さいました福岡市美術館、國學院大學図書館、耕三寺博物館、放送大学図書館および徳川美術館、香雪美術館、ギメ美術館、武蔵野美術大学図書館、東京藝術大学美術館に厚く御礼申し上げます。福岡市美術館本・耕三寺博物館本は新撮影をご

許可頂きました。
本稿は科学研究費補助金・基盤研究（B）課題番号20H01238「中近世日本の画題生成における明代出版文化の受容と展開に関する総合的研究」の研究成果である。

参考図　放送大学図書館蔵『卜養狂歌絵巻』（画像は２カットを接合）



外題

表紙

箱

見返し

図１　鼠の正月風景・猿と猫の萬歳

図２　諸葛孔明と一寸法師の曲芸

図３　蛙の舞楽

図４　狐の勅使と蛤を焼く懶瓚

図５　文覚と弘法の足相撲・時宗の行司

図６　鶯と蛙の詩歌合
（鶯・蛙・西王母と桃・おとごぜ・牛若・文字を記す蒼頡・林和靖と梅・陶淵明と菊・周茂叔と蓮・山谷と蘭・蘇武と牧羊・尺八を吹く楽阿弥・茶を点てる通円）

図６（続）

図７　韋駄天の凧揚げと足疾鬼

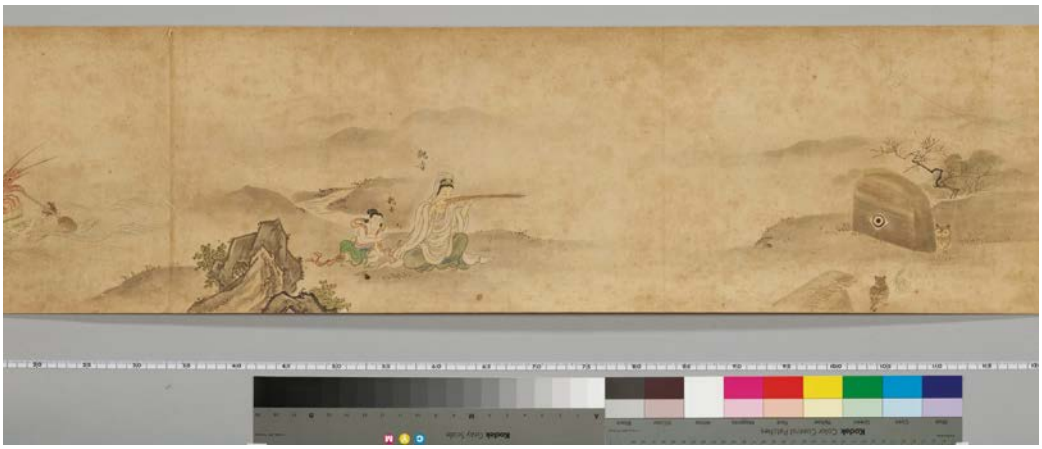


図８　観音の射的・木菟・竜女

図 9　福禄寿の竜釣り

図 10　鯰に乗る善導大師

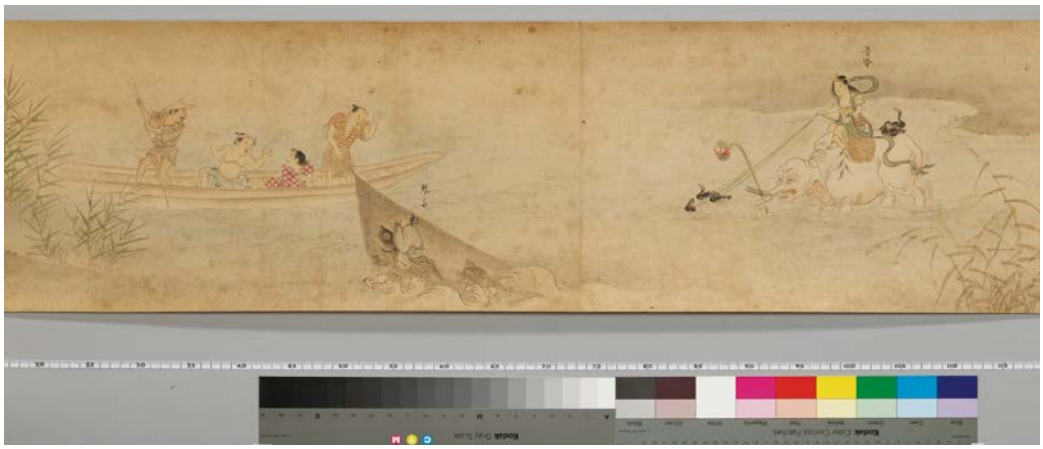


図 11　普賢菩薩の鵜飼

図 12　網にかかる琴高

図 13　迦陵頻伽を狙う鳥さし・蓮池

図 14　酒呑童子の宴
（酒呑童子・猩々・遠法師・人丸・児童（菊慈童）・西行・小町・小鬼たち）

図 15　一寸法師に追われる弁慶

図 16　翁と三番叟

図 17　風流の一群

（六祖・五祖・天神・蝦蟇仙人と蝦蟇・鉄拐・張良・東坡・樊噲・綱・明恵上人・朝比奈・熊坂）

図 18　浄瑠璃御前と車で引かれる小栗・子供たち

図 19　猪に乗る張果老・河豚・虹

図 20　おとごぜと豊干の行列
（才六・駝鳥に乗るおとごぜ・蜆子・虎に乗る豊干・寒山拾得・のろま）

図 21　龐居士一家

図 22　太公望の蜻蛉釣り

図 23　蟹に足を挟まれる雷神・蟷螂

図 24　蜘蛛の巣にかかる費長房・鶴・巻物

巻末「狩野昌運季信圖之（落款）」

図 15　巻物を読む河童

外題

國學院大學図書館蔵『異代同戯図』

図７　双六博奕

図８　かるた博奕

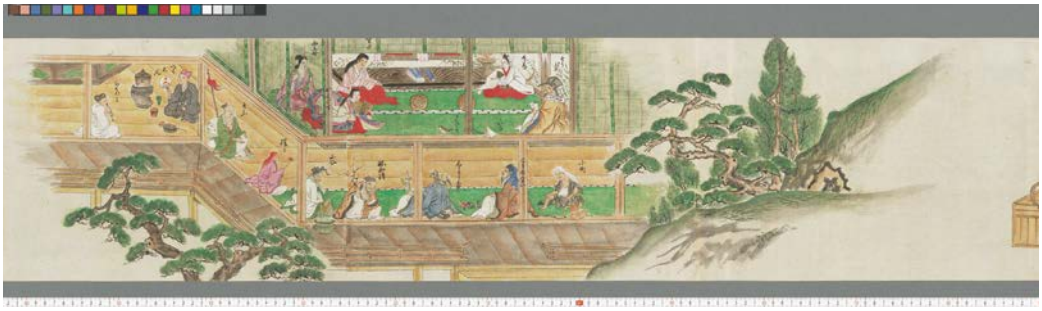
巻末「狩野昌運季信圖之（落款）」

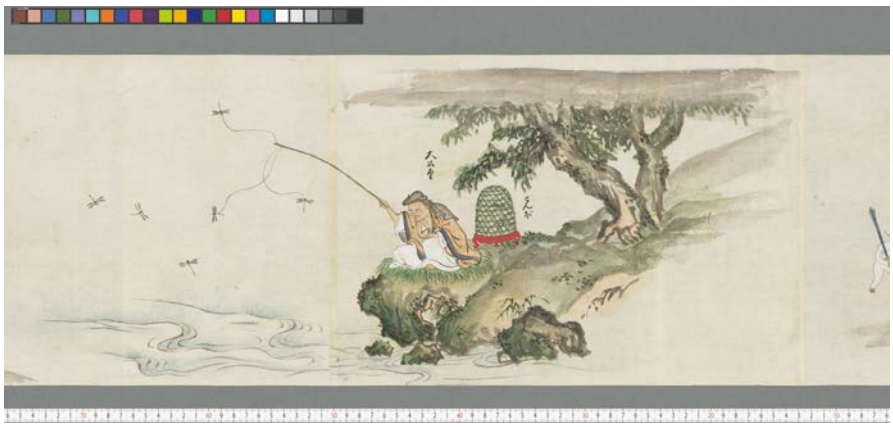
表紙・見返し

耕三寺博物館本『戯れ絵巻』

一休
比丘

木庵
隠元





	場面一覧	①福岡市美本（昌運本）	②國學院本（昌運本）	③香雪本（探幽系・暁斎旧蔵）	④徳川本（探幽系）	⑤個人蔵本（永納本）	⑥ギメ本（為信本）	⑦架蔵（伝周信本）	⑧耕三寺本（未詳）	⑨藝大本（麻布一本松狩野家）	⑩武蔵美本（未詳）	⑪大英本（周信本）	⑫明和7年刊『狂画苑』
	場面概要／図数と巻頭図	24図・鼠の正月風景	18図・大黒と天狗の武術	上16図・鷲にさらわれる風神 下14図・福禄寿と猿の首引き	上21図・鼠の正月風景 下22図・大黒と天狗の武術	13図・鷲にさらわれる風神	上16図・鷲にさらわれる風神 下16図・鼠の正月風景	11図・鼠の正月風景	16図・鼠の正月風景	14図・鷲にさらわれる風神	上3図・鼠の正月風景 下18図・鷲にさらわれる風神	11図	上16図（目次17図）・中12図・下１図
1	鼠の正月風景・猿と猫の萬歳	1			上1		下1（萬歳ナシ）	1	1（萬歳ナシ）		上1	1:寿老人と蟹	
2	諸葛孔明と一寸法師の曲芸	2			上2		下12	2	12		下2	2:川に袋を落とす布袋	
3	蛙の舞楽	3			上3	12（＋唐子）	上13	3			下3	3:鯉から落ちる琴高	
4	狐の勅使と蛤を焼く懶瓚	4			上4（書入「懶殘（ライゴウ）」）	11	上12				下4	4:大蛸に挑む韃靼人	
5	文覚と弘法の足相撲・時宗の行司	5			上5		下13（不動と僧侶の足相撲・猿と兎）	4	13（文覚と不動の足相撲・猿と兎）		下5	5:鹿・猫・狸の合奏	
6	鶯と蛙の詩歌合（鶯・蛙・西王母と桃・おとごぜ・牛若・蒼頡・林和靖と梅・陶淵明と菊・周茂叔と蓮・山谷と蘭・蘇武と牧羊・楽阿弥・通円）	6			上11		下7（＋酒呑童子・小町・猩々）		10（＋酒呑童子・小町・猩々）	6	上2	6:盲人の鬼ごっこ	
7	韋駄天の凧揚げと足疾鬼	7			上12	10	上10	5			下7	7:瓢箪に猿と兎	
8	観音の射的・木菟・竜女	8			上13（紙継ぎに墨書「十三」）		下15（梟・木菟）	6（梟・木菟）	15（書入「ふくろう」「みゝづく」「八才竜女」）	7	下8	8:鍾馗に炙をすえる猩々	
9	福禄寿の竜釣り	9			上14		上15	9			下9	9:猪に乗る梟	
10	鯰に乗る善導大師	10			上15		下9			8	下10	10:雷神に驚く烏天狗	
11	普賢菩薩の鵜飼	11			上16	7	上7	10		9	下11	11:宇治川の先陣	
12	網にかかる琴高	12		上16終	下22終	13終	上16終						下1「琴高網にかゝる探幽筆」
13	迦陵頻伽を狙う鳥さし・蓮池	13		上12	下19		下10（＋天女）						中6「飼指迦陵頻をさす」
14	酒呑童子の宴（酒呑童子・猩々・遠法師・人丸・児童（菊慈童）・西行・小町・小鬼たち）	14		上3（＋張果老・西行に酌をする牛若・陶淵明。菊慈童・遠法師ナシ）	下10（書入「慧遠法師」「小野小町」酒樽に「南都謡」）			11終（＋牛若・弁慶。菊慈童ナシ。金紙墨書「慧遠法師」「小野小町」）					中4「酒顚童子酒宴」（挿絵：人麿 陶淵明 猩々 酒呑童子 舍那王 小町 西行 長果）
15	一寸法師に追われる弁慶	15		上4	下11								上5「弁慶侏儒ニ追るゝ」
16	翁と三番叟	16		上5	下12								中11「三番三」
17	風流の一群（六祖・五祖・天神・蝦蟇仙人と蝦蟇・鉄拐・張良・東坡・樊噲・綱・明恵上人・朝比奈・熊坂）	17		上13（＋西王母・周茂叔。書入「ちやうはん」）	下20（書入「長範」）		下11（天神・綱・明恵上人ナシ）		11（天神・明恵上人ナシ）				中12終「おどり」（挿絵：菅公 山谷 臨済 蝦蟇 鉄拐 張良 樊噲 程明道 西王母 兼好 周茂叔 熊坂 余不祥）
18	浄瑠璃御前と車で引かれる小栗・子供たち	18		上14	下21								上12「小栗の餓鬼」
19	猪に乗る張果老・河豚・虹	19			上9		下8			4	上3終		
20	おとごぜと豊干の行列（才六・駝鳥に乗るおとごぜ・蜆子・虎に乗る豊干・寒山拾得・のろま）	20		上6（のろまナシ）	下13（のろまナシ）		下4（才六・乙御前・のろまナシ）						中5「やぶいり」「豊干禅師」
21	龐居士一家	21		上7	下14								中7「龐居士霊照女」
22	太公望の蜻蛉釣り	22		上8	下15		下14		14				中 8「太公望蜻蛉を釣」
23	蟹に足を挟まれる雷神・蟷螂	23		上11（＋蛙）	下18		下16終（蟷螂ナシ）		16終（蟷螂ナシ）				中3「雷神ニ蟹」
24	蜘蛛の巣にかかる費長房・鶴・巻物	24終			上10		上11			5	下18終		

25	大黒と天狗の武術・唐子たち		1	下9	下1（紙継ぎに墨書「壹」）		下2（鳶の行司。唐子ナシ。）	7（金紙墨書「太郎坊」。唐子ナシ）	2（鳶の行司。唐子ナシ）				上1「大黒と天狗剣術」
26	恵比須と布袋の武術・唐子たち		2	下10	下2（紙継ぎに墨書「二」）								上2「恵美須布袋槍けいこ」
27	毘沙門と達磨の武術・弁才天		3（蘆葉達磨）	下11	下3（紙継ぎに墨書「弐」）		下3		3				上3「達磨の居合」（挿絵：達磨のみ）
28	仁王と地蔵の相撲・老子の行司・子供たち		4	下12	下4	4（払子をかざす行司の僧）	上4（払子をかざす行司の僧）		7（行司の僧に書入「一休」）				上4「仁王と地蔵相撲」（挿絵：行司と子供のみ）
29	鷲にさらわれる風神		5	上1	上6	1	上1	8		1	下1		中1「風神ニ鷲」
30	富士の裾野・狐・兎		6	上2（猿３匹のみ）	上7（＋猿）	2（山麓の洞窟から空を見上げる武士）	上2（山麓の洞穴から空を見上げる武士。狐・兎ナシ）			2（＋猿）	下16（＋猿）		中2「風神ニ鷲」（挿絵：其続）
31	双六博奕（せうづ川ばゞ・鍾馗・小鬼たち）		7	下13	下5（鍾馗と三途川姥。紙継ぎに墨書「四」）	3	上3		6（書入「ゑんま」）				上6「鍾馗鬼子母神双六」
32	かるた博奕（観音・孔子・文殊・神農・維摩・六ほう・十王・子供）		8	下14終	下6（書入「焔魔」）	5（文殊・僧侶・仙人・孔子・神農・維摩・十王ら）	上5（文殊・僧侶・仙人・孔子・神農・維摩・十王ら）		5（文殊・弘法・寿老人・孔子・神農・廬居士・十王・維摩）				上7「聖人菩薩哥かるた」（挿絵：観音・文殊・神農・文宣王・寿老人・大黒・閻魔・僧正坊）
33	不動の逆立ち（蛙・狐・兎・狸・秋の野）		9	下2	下7								上9「不動逆たち」
34	隠元の蜘蛛舞・子供たち		10	下3	下8		下5（蜘蛛舞の下、頭に二枚貝を載せた僧が竹箕を構える）		8（蜘蛛舞の下、頭に二枚貝を載せた僧が竹箕を構える）				上10「隠元禅師軽わざ」
35	木庵と即非らの奏楽・天女 ※他本天女ナシ（ギメ本 下10にあり）		11	下4	下9（人名ナシ）		下6		9（書入「木庵」）				上11（「隠元禅師軽わざ」と一図）
36	阿弥陀の漁（四つ手網・小舟）		12	下６（小舟ナシ。僧二人が網を四つ手風に広げる。駆け寄る俊乗坊と独立）	上17（紙継ぎに墨書「十六」）					10	下12		上14「佛の川狩」（挿絵：其二 阿弥陀の漁猟・其三）
37	釈迦の漁（網・守敏・小僧ら）		13	下5	上18					11	下13		上13「佛の川狩」（挿絵：釈迦の殺生）
38	独立の釣り		14		上19					12	下14		
39	巻物を読む河童		15		下16								
40	橋を渡る兼好・振り返る目蓮 ※他本に兼好の名ナシ		16	下７	上20（紙継ぎに墨書「十八」）					13	下15		上15「佛の川狩」（挿絵：其四）
41	日蓮と法然の腕相撲・僧侶・在家		17	上10	下17（人名ナシ）	9	上9		4				中10「法師の腕だて」
42	阿難の酒宴（阿難・親鸞・迦葉・俊乗坊）		18終	下8（俊乗坊の名ナシ）	上21終（俊乗坊の名ナシ）					14終（俊乗坊の名ナシ）	下6		上16終「佛の川狩（挿絵：其五畢）
43	文覚の滝行			上9									中9「文覚荒行」
44	駱駝に乗る猿			上15									※上17・目次「猿猴駝に乗」のみ
45	福禄寿と猿の首引き			下1									上8「福禄寿首引」
46	僧侶と兎				上8（数珠を兎の首に交差）					3（書入「西行」。兎の首に数珠を交差）	下17（兎の首に数珠を懸ける）		
47	白兎と武士の首引き・笑い転げる兎たち					6	上6						
48	弁慶の長刀を奪おうとする大蛸・武士					8	上8						
49	阿弥陀たちの蹴鞠（恵比須・釈迦・布袋ヵ・唐子たち）						上14						

※昌運本を基準として各図の概要を記し、諸本は図の掲出順をナンバリングで示した。
ギメ本は整理番号MG4318（ラベルNo.93）を仮に上巻とした。武蔵野美術大学本は199801004500を仮に上巻とした。図様が大きく異なる大英本は概要を掲出順に注した。

書誌データ

	福岡市美本	國學院本	耕三寺本				藝大本			
表紙	31.7	31.7	表紙	26.2	第21紙	36.9	表紙	25.0	第21紙	10.1
見返し	32.0	32.0	見返し	24.1	第22紙	37.3	見返し	25.0	第22紙	27.7
第１紙	131.2	132.9	第１紙	37.3	第23紙	37.5	第１紙	24.8	第23紙	5.5
第２紙	131.8	130.0	第２紙	37.6	第24紙	37.2	第２紙	20.2	第24紙	11.3
第３紙	131.6	129.6	第３紙	37.4	第25紙	37.4	第３紙	21.4	第25紙	27.5
第４紙	132.5	130.7	第４紙	37.1	第26紙	37.0	第４紙	26.9	第26紙	27.5
第５紙	131.8	130.4	第５紙	37.4	第27紙	36.2	第５紙	26.9	第27紙	10.7
第６紙	130.6	130.1	第６紙	36.8	第28紙	（白）17.2	第６紙	6.3	第28紙	19.3
第７紙	113.3	130.2	第７紙	37.3	第29紙		第７紙	13.8	第29紙	27.5
第８紙	18.3	130.9	第８紙	37.4	第30紙		第８紙	27.6	第30紙	16.7
第９紙	131.3	（白）8.3	第９紙	37.5	第31紙		第９紙	27.6	第31紙	27.5
第10紙	130.8		第10紙	37.5	第32紙		第10紙	27.7	第32紙	27.3
第11紙	91.5		第11紙	37.4	第33紙		第11紙	27.4	第33紙	13.0
第12紙	81.7		第12紙	37.3	第34紙		第12紙	6.5	第34紙	4.9
第13紙	（白）9.0		第13紙	37.5	第35紙		第13紙	21.6	第35紙	26.5
第14紙			第14紙	37.5	第36紙		第14紙	5.2	第36紙	26.8
第15紙			第15紙	37.5	第37紙		第15紙	26.8	第37紙	5.0
第16紙			第16紙	37.5	第38紙		第16紙	26.8	第38紙	7.9
第17紙			第17紙	37.5	第39紙		第17紙	26.9	第39紙	27.3
第18紙			第18紙	37.6	第40紙		第18紙	18.5	第40紙	27.0
第19紙			第19紙	37.5	第41紙		第19紙	22.8	第41紙	10.7
第20紙			第20紙	37.7			第20紙	17.4		